

「ハンブルク市ハーフェンシティの挑戦 - 縮小社会における都市生活について考える」

1. 講演要旨 (スライド2)

20世紀の文明を支えてきた石油資源の減耗が21世紀半ばまでに現実化するなかで、21世紀も人口の大都市への集中が引き続き起こると予想されている。石油減耗時代に対処するためには、大都市の持つ物質的な豊かさよりも地方の持つ精神的な豊かさに魅力を感じるように、地方で雇用を創出して大都市に住む住民を誘導していくという考え方が本命であろう。しかし一方で、大都市への集中が必然であれば、大都市を精神的な豊かさに魅力を感じる都市に変えて行くという発想も第2選択として必要と思われる。

講演では、ドイツ第2の大都市であるハンブルク市が21世紀型の新都心として建設中のハーフェンシティを取り上げ、その理念や計画の進め方について触れるとともに、大都市に精神的な魅力をもたらすためには何が必要かについて自説を述べる。キーワードは大人のためにサンマ作りである。

2. 21世紀の人口問題に関するキーワード (スライド3)

都市から地方への人口移動を促すことも大切であるが、大都市への人口集中が必然であるなら、大都市をエネルギー消費が少ない都市、物質的欲望を満たす都市から精神的欲望を満たす都市に変革することも大切。21世紀型新都心計画を推進中のハンブルク市・ハーフェンシティに注目

3. ハンブルク市とハーフェンシティ計画の概要 (スライド4~9)

- ・ ハンブルク市はハンザ同盟の盟主で古くからの港湾都市。人口170万でドイツ第2
- ・ 持続可能性に配慮した、21世紀に相応しい新都心を創るという理念のもと、20世紀末から現在の都心に隣接して新都心ハーフェンシティ計画をスタートさせた。計画策定は短期間で、計画実行は市民と対話しながら時間をかけて行っている。
- ・ 総開発面積は157ヘクタール（陸上部119ヘクタール、水上部38ヘクタール）
- ・ 土地の割り振りを決めており、トラフィックエリアよりパブリックエリアを重視
- ・ 中低層の建物が主で（市庁舎や教会の尖塔より高い建物は建てられない）。
- ・ 45000人の雇用と6000戸、12000人分の住宅を造る
- ・ ルーツである親水性を保つため、総延長10.5kmの水辺の遊歩道を造る
- ・ 総投資額は69~74億ユーロ（8500~9000億円）でリニア新幹線の1/10

4. ハーフエンシティのコンセプト（スライド 10～18）

1) 21世紀に相応しい持続可能な都心

- － 土地の有効利用
道路・駐車場の占める比率を減らし、パブリックスペースを 39 %と広く取る
- － 持続可能なモビリティ
徒歩と自転車を中心とする交通コンセプトと公共交通への接続を良くする
- － 熱エネルギー排出量の低減
発電と熱発生を併用した地区の暖房ネットワークと分散型熱供給システム

2) 文化に満ちた都心

- － 斬新なデザインのエルブフィルハーモニーコンサートホール
- － 水辺のプロムナードなどで様々な文化イベントを開催

3) 楽しい都心生活

- － エルベ川の洪水対策で、住宅の価格は他地区の住宅に比べて割高で批判が強い
- － 職住近接、教育施設やレジャー施設などへの好アクセスで、居住する魅力を高める
- － 子育て世代にとって魅力的な環境と同時に 50 歳以上の世代にも魅力的な環境える
→世代間で偏りのない居住者構成を目指す

4) パブリックスペースの充実

- － 道路や平面での駐車場を狭め、その代わりにオープンスペースに多くのスペースを割り当てる
- － 10.5 km もの川辺のプロムナード

5) インフラ整備

- － 最大の自然災害であるエルベ川の洪水対策は盛り土の上に建物を建設し防御壁を設けることで対応し、親水性を阻害する高い堤防で囲む愚策は行わない
- － 盛り土上に主要道路と橋を新設（歴史的保存地区は除外）
- － 環境に配慮した公共交通（U バーンと水素燃料バス）と歩道・自転車道を重視した交通システムの構築。水上交通も重視
→自家用自動車交通への依存度を 47%から 24%に減らす

5. ハーフエンシティ計画から見えてくること（スライド 19）

1) 計画のコンセプトは素早く決め、実行は市民の意見を聞きながら時間をかけて行う

2) 大人のためのサンマ作り

- － 1960 年代に子供達の日常界からサンマがいなくなったことが社会問題になった
- － 子供達を育てる大人達の日常界からもサンマがいなくなったことも大きな問題
- － ハーフエンシティ計画では大人達のためのサンマ作りも重視
- － サンマ：時間、空間、仲間の 3 つの間
- － 縮小社会になっても、楽しく充実した生活が送れる都市